

2021年度 人間環境学コロキウム「まとめ」

テーマ「コロナと大学-環境の変化を多角的視点・分野で捉え直す」

日時：2021年8月10日（月）10:00～12:00

形式：Zoomによるオンライン開催

<教員登壇者>

- ・ 當眞 千賀子先生（人間環境学府都市共生デザイン専攻）
- ・ 久米 弘先生（人間環境学府教育システム専攻）
- ・ 吉良 安之先生（実践臨床心理学・九州大学名誉教授）

流れとしては、学生代表から「コロナによる大学生活の変容」について、変わったことや困ったことなどを話した。それを受けて三人の登壇者の先生方から報告をしてもらい、その後学生同士グループワークをして、意見をとりまとめて質疑応答を行った。

なお、コロキウムは学生委員長を中心として、各自司会などの役割分担をして実施した。概要は以下のとおりである。

久米先生からの報告

コロナウイルス感染症の流行でもっとも変化したことは、授業が対面から遠隔になったことです。この遠隔教育で一番大事なことは、事前になんらかの形式で、教員の受講生が「顔合わせ」すること。幸い、最初の赴任地が遠隔教育に力を入れていたため、それなりの知見を持っています。当時（30年くらい前）は、コンピュータで電子メールのやりとりで遠隔教育を実施していました。電子メールといっても、文章のやりとりしかできませんでした。

今日では、映像で通信できるのが当たり前になっていますね。そのような状態で、例えば自分が心がけていることは、いかに表情豊かに接し、臨場感を持たせるか、です。自分は、遠隔教育を前提に、全ての授業を録画しています。その際、スライドと話している映像を別に撮影し、編集して1つの映像ファイルを作成しています。つまり、オンデマンドにはすでに対応済みなのです。

それから、映像送受信の遠隔教育を成功させるためには、あらかじめサクラを決めておき、顔を見てもらうことがとても重要です。いわば「顔き係」という役どころですね。

このように教員が対応していくと、学生たちもカメラをオンにして参加してくれる数が増えていきます。教員は参加している学生たちが顔を見てくれるのではないかと、多分そうだろうと、想像しながら話を進めていきます。学部や学府の授業は人数が少ないので、初めからカメラをオンにしてくれますが、学部1年生の場合には、なかなかうまくいきません。秋から、基幹教育の授業を担当します。「顔を見せないなんて、失礼甚だしい」と「キレて」みようかとも思っていますが、まずは、どれくらい学生が顔を出してくれるか、実験するつもりで臨みます。さらに、教材の提示の仕方は改善が必要です。例えばzoomでは共同ホストで事故を防ぐことが必要だし、実際に防ぐことができます。

教員が表情豊かにするためには、実は、練習も必要です。真面目な話、髭を剃りながら、

鏡を見て練習していたこともありましたが、参考にしたのは、キャビンアテンダントの方々。彼らは、目は笑っていないのです。何しろ、安全チェックしているわけですから。それと、練習するということは、アクターとしての教師ために必要なスキルです。

学生に期待したいことは、メモを取ることです。単に提示されたスライドの文言を書き写す、極端な話、写真撮影する、ことだけではなく、教師の話のどこが重要なのかということだけでなく、自分はどう考えていたのかということと対比し、ノートを取ることが重要です。要するに、「自分で考えて」書くことに意味があるのです。

眞先生からの報告

遠隔授業で重視すべきことは、「目の前に人がいる。会いたい人がそこにいる。」と思うこと。そうすればインタラクションがうまれる。教える内容と形が違わないように心がけている。遠隔授業であっても、対話型の授業では聞く側の理解度を探りながら行う必要があり、受講者から問いかけもうまるとよい。グループにすることで発言しながら対話することを実現できる。授業形態に関わらず、問いながら考える体験は外さないようにしている。授業形態の変化によるリスクをいかに下げられるかを考えながら、授業の中身を自在に変え、学生の力を借りながら、自分たちで自分たちの授業を作っている。そうすることによって、学生の自主的関心も高まり、受け身での受講にならないというメリットも生まれる。

吉良先生からの報告

私は、学生相談をしていたので学生の声をもとに話します。去年の春の大学に来れなくなったところに一番多かった相談は1, 2年生からで、人間関係を作る機会がない、オンライン操作ができないというようなものが多かった。また、オンライン授業の問題点として、授業を受ける安定した場所がない、レポートが多い、目や腰が痛い、生活リズムが崩れるといったものを挙げ、相談してくる学生もいた。

その反面、オンラインが好きな学生もいて、自分のペースで落ち着いて勉強ができる、好きじゃない集まりに参加しなくていい、化粧が簡単になったなどといった声もあった。良い面もある大学のオンライン化だが、特に論文を書く学生は図書館が使えないことや、実験実習ができないことを痛手と感じているようです。逆に、就職活動はオンラインでできることをメリットと感じる学生もいた。一人暮らしだとアルバイトができず、家族と同居だとストレスが溜まる、と言うように、学生の心のケアが必要。コロナ禍で、人と会って軽く挨拶するような簡単な人間関係が失われてしまっているため、まずはそういった小さな人間関係を大事にしていくことが大事だと思う。時には一人で気晴らしに遊びに行ったり、友達とコロナ禍で困っていることについて意見交換をしたりするのも良いだろう。このコロナ禍において、特に新入生が大変だと思う。そもそもサークルなどに所属して先輩に相談するという機会がなく、困っている。大学側の支援はこれからも2、3年と、続けていかないといけないだろう。

三人の先生の報告の後に、グループワークを行い質疑応答の時間をとった。

以下は、質問と応答(応答は→で表示)。

・挨拶をする人が減っている。挨拶にとって替わるコミュニケーションは何かあるか？

→吉良先生

生活や人間関係を、心理学では「ひげ根」に例える。太い根以外の細かな根があちこちにあるのが普通の人付き合いだといわれている。たまには学校に行ったりして人と接する機会があると思う。声をかけようかどうしようか迷ったら一言声をかけてみるのが大切だろう。SNSの繋がりが大事だという人もいる。

社会に出てからは、たくさんの挨拶だけの付き合いがある。学生の内からそれを訓練できる代替はあるのか？SNSでできる挨拶が、現実にはできない。

・オンライン講義でいいと思ったこと悪いと思ったこと、どちらが多いか？

→當眞先生

オンライン講義のほうが参加しやすいという人が意外に多い。しかし、対話形式は対面には追い付かない。オンラインも頑張ったが、ブレイクアウトルームなどの操作や、対面とは違う完全な分離もあって、対面には及ばない。オンラインが楽というのはメリットのようで、対面が難しいけど頑張ってついていくという努力ができないという欠点もある。

・新型コロナ収束後はオンライン授業はどうなるのか？

→学生の一部はオンライン授業を希望している。伊都まで移動する授業を取れない時期があったので、その辺の機会平等のためオンラインはほしい。

→久米先生

オンライン講義を前提としたワークシートシステム(X10)を作った。

<https://nosuri.edu.kyushu-u.ac.jp/xio/>

最後の授業で、「ぶっちゃけた話、オンデマンドだから履修した」と話してくれた学生もいたし、オンラインで場を楽しんでもらえているようだった。社会人院生たちは伊都までくるのが難しい場合があり、オンラインやオンデマンドの授業は、ある程度残しておく必要はあると思います。

また、授業では次のような工夫をしています。対面授業では、2種類のスライドを2台のプロジェクターとスクリーンを使って、必ず2組出します。メインと、直前に提示した内容のスライドです。それから、スライドには、要点だけ表示する。文字を大きくすることが大切です。日本教育工学会では、「基準」があり、もし、基準を満たしていないようなスライドが提示されると、後ろから「見えません！」と声がかかってしまいます。これはとても恥ずかしいことなのです。

・今の時代、他の大学から来た学生からの相談は多いのか？

→吉良先生

7, 8 年前から他大生向けの学生相談のオリエンテーションをしていた。しかし去年はできなかった。大学院のオリエンテーションは学部よりおおざっぱで新入大学生は苦労している。留学生も大変なので先生も考えてほしい。

→久米先生

大学院では研究室でオリエンテーションしている前提だと思うので、各研究室で差がある。特に留学生に対しては、2, 3 か月前からゼミに参加してもらって、日本語の練習や演習形式に慣れてもらっている。

・学校には授業以外の要素もある。大学とはなにか？

→久米先生

学校で学習者が過ごしている時間の中で、最も多くの時間が割り当てられているのは、授業です。従って、全ては授業にある、という立場です。しかし、学問領域が異なると、例えば、母数を起きている時間にすれば、授業の割合は少なくなります。クラブ活動などで、先輩との付き合いが大事なのも認めますし、実際、自分自身も大事にできています。学校という場は、社会のための練習の場、なのですね。

→吉良先生

大学院では授業からだけではなく先輩、同期との日常のやり取りから得たものが多かった気がする。付き合いの中でセンスみたいなものを身に着けることで本の内容もわかってくる。本だけ読んで研究できるなら大学院は要らない。そういう人が集まっているエネルギーが大学院にある。

→當眞先生

知識の伝達だけなら大学でなくてもできる。問う、技能を通す、揺さぶりあうなどの、場があって初めて生まれるものがあるはず。場を作る一員である学生自身も問いながら、大学側もそういう文脈を応援するのが大事。私もそういう議論の場を大事にしたいのでコロキウムに参加した。

以上を今回の結論として、コロキウムを終了した。